股関節鏡視下に除圧を施行した下前腸骨棘インピンジメントの一例

金沢医科大学　整形外科

福井清数　兼氏歩　市堰徹　高橋詠二　津田亮二　川原範夫

症例は20歳の男性で、2016年4月頃よりサッカーをしている際に右股関節痛、可動域制限を自覚。1ヶ月部活を休み安静にしていたが改善なく、それでも部活を再開したところ痛みの増悪を認め、部活を継続することが困難となったため2016年6月に当科初診。高校生の時に同じくサッカーで下前腸骨棘の剥離骨折を受傷した既往あり。身体所見では屈曲、外転、内外旋が対側に比し制限を認めた。またインピンジメントサインに加え、下前腸骨棘部の圧痛を認めた。レントゲンでは大腿骨頸部のpistol grip deformityに加え、下前腸骨棘の剥離骨折後遺残変形に伴う下垂を認めた。Zed hipを用いたシミュレーションにて下前腸骨棘インピンジメントが症状の主因であると判断し、股関節鏡視下にcam lesionに対するosteochondroplastyに加え、下垂した下前腸骨棘のtrimmingを施行。術後10か月現在、疼痛、可動域制限ともに改善し経過良好である。